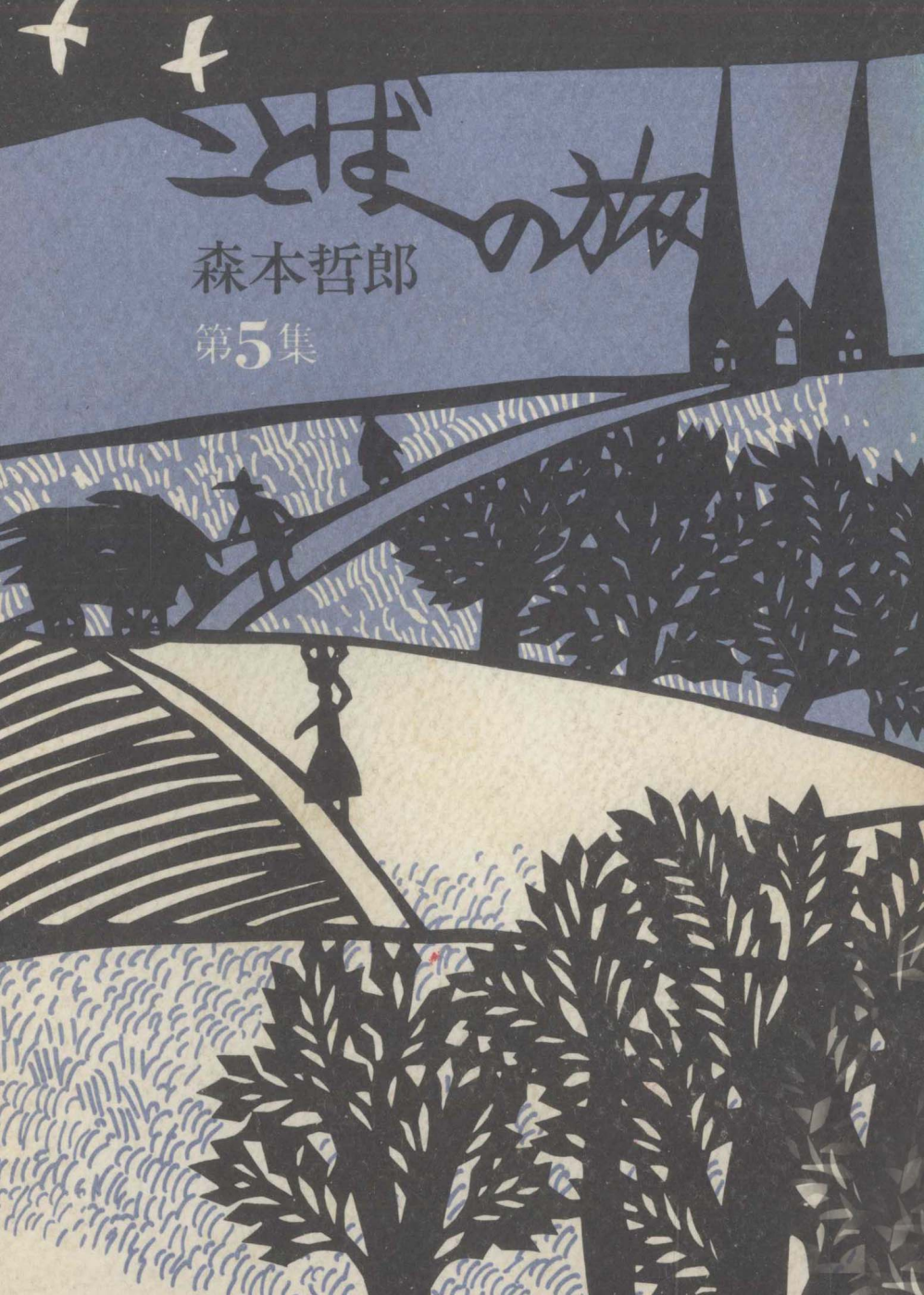


とぼの旅

森本哲郎

第5集



五右衛門の旅

森本哲郎

ダイヤモンド社



著者略歴

もりもと てつ ちろ
森 本 哲 郎

1925年東京に生まれる。東京大学文学部哲学科、同大学院社会学科を卒業。朝日新聞東京本社学芸部次長、『週刊朝日』副編集長、朝日新聞編集委員を経て、現在、評論家。

著書：『文明の旅』（新潮社）、『人間へのはるかな旅』（潮出版社）、『サハラ幻想行』（河出書房新社）、『詩人と謝蕪村の世界』（至文堂）、『イースター島——遺跡との対話』、『タッシリ・ナジェール』（以上平凡社）、『そして——ぼくは迷宮へ行った』（芸術生活社）、『生きがいへの旅』、『ゆたかさへの旅』、『ぼくの旅の手帖』、『ことばへの旅』＜第1集・第2集・第3集・第4集＞、『異郷からの手紙』、『あしたへの旅』、『旅と人生の手帖』、『すばらしき旅』、『四季の旅』（以上ダイヤモンド社）など多数。

現住所：東京都杉並区永福 2-4-3

電話 03-325-3032

ことばへの旅——第5集

昭和53年12月21日 初版発行

著 者 森 本 哲 郎

© 1978 Tetsuro Morimoto

発行所	ダイヤモンド社	郵便番号	100
		東京都千代田区霞が関	1-4-2
		編集 電話	東京 (504) 6403
		販売 電話	東京 (504) 6517
		振替口座	東京 9-25976

編集担当／花田茂明

落丁・乱丁本はお取替えいたします

加藤文明社印刷・高陽堂製本

1010-615050-4405

まえがき

人生は旅だ——といひます。が、もしそうなら、その旅はどこへ向かつての旅なのでしょうか。

それを考えるとき、私はいつも一人の猟師を思い浮かべます。彼は腕ききのハンターでした。腕におぼえがあるものですから、ある日、ひとりであらりとアフリカのジャングルへ入って行きました。ジャングルを抜けて、となりの村まで行こうと思ったのです。そこへは、これまでだれひとりとして踏みこんだ人はいなかったのですが、彼は平気でした。朝早く出れば昼ごろ着くだろう。そう思ってコンパスも持たず、マツチも、水筒さえ用意せずモーゼル銃だけを肩にして出発しました。

最初の二、三マイルは、べつに何事もありませんでした。山査子さんざしの繁みが心地よい蔭をつくって暑さを防いでくれました。し、犀ライノやライオンの足あとを

見ても、腕に自信のある彼は気にもとめず、鼻唄まじりで進んで行きました。

すると、とつぜん、前方に人間の足跡らしいものが目に入りました。「はて、何だろう」と彼はつぶやき、近づいてよく調べてみると、それはまぎれもない人間の足跡でした。

おかしい。このジャングルには自分以外にだれも入っていないのだからと、そう思っ
てなおも仔細に点検してみると、それは、なんと自分の足跡なのでした！
彼は進んでいるつもりで、じつはぐるぐる回っていたのです。

自分の足跡だと気づいた瞬間、彼は度を失ってしまいます。彼は生れてはじめて精神の激しい動揺に見舞われ、へなへなとそこへ坐りこんでしまう。自分がいかに思いあがっていたか、いかにアフリカの大地を甘くみていたか、それをいやというほど思い知らされたのです。アフリカのジャングルで道に迷うことは死ぬことです。マツチも、水筒も、コンパスさえ持ってこなかったではないか。

彼は勇を鼓して立ちあがり、ふたたび前進しました。夜どおし歩き、夜が明けましたがジャングルはいよいよ深くなるばかりです。さらに歩きつづけているうち、彼はまたしても自分の足跡にぶつかりました。彼は動顛^{どうてん}し、絶望し、

正気を失いかけます。

それから？ それからの話はどうでもいいでしょう。彼は恐怖と絶望と疲労とで錯乱しながら歩きつづけたすえ、ついに倒れてしまうのです。そして、ふと気がついたとき、頭の上に一条の電線が走っているのを目にとめる。彼はふらふらと起きあがり、その電線に沿って藪を払いのけながら進み、やっとの思いで電柱にたどりつきます。彼はその電柱にとりすがって、思いきり泣きじゃくりました。助かったからです。この電線をつたって行けば、いつか村に到達することができ……。

（J・A・ハンター著『ハンター』川口正吉訳）

私もアフリカのジャングルを歩いたことがあります。サハラで道に迷ったこともある。ですから、彼の気持ちが生じつによくわかるのです。あの、自分の足跡にぶつかったときのおどろき。「はて、何だろう」と思いながら近づいて行き、それが自分の足跡であることを発見したときのあの驚愕。

それは何とも名状しがたい気分です。なにしろ、不意にもうひとりの自分に出会ったわけですから。それは何と言ったらいいか……。夢のなかで、また夢を見て、その二重の夢からいきなり醒めたときのような気分——とでもいう以

外に表現のしようがありません。私はサハラの奥のタッシリ台地で、キャンプ地へもどる途中、道に迷ってそれをまざまざと体験しました。二度と忘れることのできない貴重な体験でした。そしてそのとき、これこそが人生なのではないか、と私は気づいたのです。

そう。人生とは、自分の足跡を発見することです。自分を見つけることです。つまり、人生という旅の目的地は「自分」なのです。

本集で私は、そのような「自分への旅」を考えてみました。ここでとりあげたのは、ことばのジャングルをさまよいながら、とつぜん自分の足跡にぶつかったときのようなおどろきを与えてくれた十五のことばです。

あのハンターは、あの経験が自分をつくってくれたと言っています。おなじように、私をつくってくれたのも、こうしたことばの数々でした。ことに少年時代に出会ったことばの数々。私はこれらのことばに感謝しつつ、その感動を本集に記しました。

森本哲郎

目 次

まえがき

1 人間を解くカギについて

開け、ゴマ！

——アラビアン・ナイト

3

2 「風流」について

秋風吹不盡
總是玉關情

——李
白

17

3 ふたたび「風流」について

だれが風を見たでせう
ぼくもあなたもみやしない

——クリスチナ・ロセッティ

31

4 至福の世界について

お馬ののりかえ、お駕籠ののりかえ、
お馬ののりかえ、お駕籠ののりかえ、

——日本のわらべうた

45

5 ふたたび、至福の世界について

おお、押してくよう。

——芥川龍之介

59

6 沙漠について

月の沙漠を、はるばると
旅の駱駝がゆきました。

——加藤まさを

73

7 「待つ」ということについて

までどくらせどこぬひとを
よひまちぐさ
宵待草のやるせなさ

——竹久夢二

87

8 青春について

君が生れつきコウモリに造られているとした
ら、ダチョウになろうなどと思つてはいけない。

——ヘルマン・ヘッセ

101

9 禍わざわいについて

人間は、禍いを抱きしめているとは知らず、その贈り物を有頂天になって喜ぶことだらう。

——ヘシオドス

115

10 「中ちゆうくらゐ」について

目出度めでたさも中くらゐちゆうゐなり也おらが春

——茶

129

11 永遠について

祇園精舎ぎおんしやうじやの鐘かねの聲こゑ
諸行無常しよぎやうむじやうの響ひびきあり

——『平家物語』

143

12 身のほどについて

お前たちの不幸は自分が原因なのだ。

——イソップ

157

13 生命の不思議について

自然は経験を必要としない。

——ヤーコプ・フォン・ユクスキュル

171

14 人間の絆きずなについて

汝わや可愛めんこいぞ。心こゝろから可愛めんこいぞ。

——有島武郎

185

15 ものの見方について

要するに、大したことじゃない。

——林語堂りんごど

199

あとがきに代えて

ことばのしおり

215

装幀・切り絵 安野光雅

ことばへの旅

1

人間を解くカギについて

開け、
ゴマ！

——アラヒアン・ナイト



少年のころ、私がなによりも愛読したのは『少年講談』でした。新しい巻が発行されると、私はそのために貯金していた小遣いをかき集めて、本屋へとんで行きました。本屋はわが家から歩いて十分ほどのところにあったのですが、私はいまでもその道筋をありありと覚えています。いくばくかの銀貨を握って——『少年講談』は、そのころ、たしか八十銭ぐらいでした——胸をときめかせながら一散に走って行く。片側は学校の石の塀がつづいており、反対側は商店、ところどころ草の生い繁った空き地が、ぬけた歯のあとのように断続していました。

行きはそんなぐあいでしたが、帰りはカタツムリのようなのろのろ歩きでした。というのは、家に着くまで待ちきれず、私は本屋を出ると歩きながらすぐに読み始めたからです。いまの子供たちには、そういうマネはできないでしょう。う。そんなことをしていたら、自動車にはね飛ばされてしまうでしょうから。

しかし、私の少年時代は、東京と言っても、まだまだ牧歌的でした。私は本を読みながら歩き、夢中になると歩くのがまどろっこしくなって途中の空き地に入りこみ、草を踏み敷いてそこに腰をおろし、あたりが薄暗くなるまで読み